

学校裏サイト

☆ようこそ☆

ここは日木日月学院二年B組の学校裏サイトです

関係者以外立ち入り禁止！ パスワードは担任の苗字の画数です
パスワードを入力する 「 」

ここは伝道師のサイトです

あなた方に伝道したいと思って作りました

ここでは全てが露わになります

隠している秘密も 消したい過去も

■スレッドを見る

■新規スレッド作成

■スレッド検索

§ 一章 ヨーコ §

転校して最初の昼休みだった。

「ね、ね、藤代さん」

お財布を持って立ちあがった私は、後ろから声をかけられた。振り返ると、私より頭一つ分ほど下に、満面の笑みが見える。

「あ、えつと、確か……」

みょうじ苗字を思い出そうとするが、すぐに出てこない。

「あはは、そんなに堅苦しくしないで！ 私の名前なら、ヨーコだから！ ヨーコって呼んでね」

「え？ ヨーコ……ですか？」

「うん、ヨーコ。クラスみんな、そう呼ぶから。私も、藤代さんのこと、サツキって呼んでもいい？」

「え、あ、それはもちろん、構いませんけど」

私はどぎまぎしてしまう。もともと、あまり人と話すのは得意ではない。

「じゃあ、サツキね！ よろしく、サツキ」

ヨーコはそう言つて、目を線みたいに細くして笑った。色が白いヨーコは、ほお頬と唇だけが赤くて、鼻がちゃんと小さい。幼い子供のような笑顔だった。

「うん……よ、よろしくお願いします。ヨ、ヨーコ」

言いながら、私は自分の髪の毛をいじる。いきなり名前で呼ぶなんて、何だか落ち着かない。こんなことしていいのかな、なんて思う。

「うん。それからサツキ、敬語も禁止だからね」

「け、敬語もですか？」

「そ。あんまり堅苦しいと、クラスになじめないよ？」

ヨーコは教室を見回しながら、また笑う。転校生と話しているのが興味を引くのか、クラスの何人かが私とヨーコを見ていた。みんな、ほほえ微笑んでいる。私は赤面してしまう。

「わ、わかりま……わかった、ヨーコ」

私は小さな声で言う。やつぱり名前で呼び捨ては、抵抗感がある。続けていけば、慣れるだろうか。「うん！ 学食行くんでしょ？ 一緒に、行こ！ こっちだよ」

ヨーコは小さい体でちょこちょこと私の前に回り込み、歩き出す。ポニーテールがさりと揺れた。「はい……いや、うん」

後に続く。教室から出て行く私たちに、視線が注がれる。好奇の目ではあるが、そこに悪意はない。みんな、穏やかな顔で、新しい仲間を歓迎する笑みを浮かべていた。

うまくやっていけるかも。

私は緊張でどきどきしつつも、そう思った。

「へえ、サツキは横浜よこはまの高校から来たんだ」

「うん。お父さんの仕事で、転勤が多いの」

購買で焼きそばパンを買いながら、私たちは話す。

「そうなんだ、大変だねー。あ、サツキはコーヒー飲む人？」

「え？ コーヒー、好きだけど」

「じゃあ、ホイ」

「ひゃっ」

ヨーコは缶コーヒーを一本、私の頬ほおに押し付けた。冷たい感触。

「あはは、サツキ、リアクションいいね。これ、おごり！ 二年B組によろこそ、ってことで」

「え？ あ、あ……ありがとう」

私は缶コーヒーを受け取る。

思わず大事に両手で包み持った。

「今日だけね！ 特別。あ、おぼちゃん、これとこれとこれとこれ、ください」

ヨーコは手際よく四つのパンを取ると、握っていた手から小銭をおぼちゃんに渡す。がさがさどじニールの音をさせ、ヨーコはパンを抱えた。

「四つも？」

目を丸くする私に、ヨーコは照れ笑いを浮かべる。

「一つじゃ足りないんだよね……五時間目とかに、おなか鳴っちゃう」

こんなに小さな体に、よく入るなあ。

くすつと笑ってしまう。それに自分自身で、びっくりする。学校で、自然に笑っちゃった。

転校が多い私は、仲の良い子ができても、すぐ離れ離れになってしまうことが多い。なので、いつからか友達を作ることあきらを諦め、教室では一人本を読んでばかりいた。いじめられるわけでもないのだが、影も薄い。一人ぼっちのご飯、一人ぼっちの登下校。

中学の間も、高校に入っても、ずっとそんな存在だった。

だから、こうして学校でおしゃべりなんて、久しぶりのことだった。

「ヨーコちゃん、またパンいっぱい買ってるね。太るぜー」

学食に並んだ机の一角から、誰かが言う。

「もう、うるさいなあ、アツシ」

何人かの生徒が、うどんを食べている。教室で見た顔だった。

「あれ、転校生と一緒に？ こっち席空いてるよ、おいでおいで。俺も転校生と話したい」
アツシと呼ばれた男子生徒が、こちらに手を振る。

「しょうがないな。サツキ、いい？」

ヨーコに聞かれ、私はおずおずと頷いた。

「サツキって、髪スッゴい綺麗だねー。長くて黒くて、つやつやしてる。どんな手入れしてるの？」

「うーん、何も特別なことはしてないけど、お爺ちゃんの工場で作ってる櫛のリスを……」

「え？ サツキのお爺ちゃんって、工場経営者なの？」

「うん、櫛の研究をしているんだけど、リスや石鹼も作ってるの」

「へー凄いいんだな！ あ、サツキの携帯、姉貴と同じだー。これ、電池の持ち、マジ悪くない？」

私はみんなから質問攻めにあう。嬉しいのだが、引っこりなしなのでパンを食べる余裕がない。

「もー、私がサツキとおしゃべりしようと思ってたのに」

ヨーコはそう言いながらも、にこにこしている。

「ねえねえサツキのリス、今度使わせてよ。試供品とか、ないの？」

私の髪にしきりに興味を持っているのは、出席番号二番の秋山カナエ。茶髪でキッチリ化粧した、ギャル風の子だ。きりつと通った鼻筋、形のいい眉。男性的な顔。携帯にはたくさんのアクセサリーがついていて、動かすたびにジャラジャラと音を立てる。

「シャンプーなら、試供品もらえると思うよ」

「やった！ ちょうだいちょうだい！ 次からは買うからさー。ね、ハルナも欲しいでしょ？」

「うんうん」

ハルナが頷く。この子はさつきから、カナエの発言に相槌を打ってばかりいる。カナエを真似ているのか、茶髪にアクセサリーだらけの携帯と、同じような風貌をしている。背は私よりも低いよだが、やや太り気味で、体が大きい。草食動物を思わせる小さな目をしばたかせて、ハルナは続けた。

「あと……サツキ……パンいらないの？ なら……くれる？」

「あ、ごめん。これ、食べるの」

私は慌ててやきそばパンを口に運ぶ。ハルナは残念そうに首を傾げた。

「ハルナ、そんなに食いしん坊だとカバみたいになるよー」

カナエとヨーコが笑った。ハルナはふんと鼻を鳴らす。

「ならない……もん……」

「サツキ、ごめんねー。こいつ、食べ物は何でも欲しがるからさ。ハルナ、腹減ってんならあたしのおにぎり、半分あげるよ」

カナエは歯を見せて笑いながら、ハルナの頭を軽くなでる。

「ま、これから同じクラスってことで、よろしくね！ 困ったことがあったら何でも聞いて。渋谷の案内とか、任せといて」

私を見て、カナエはちつとウインクした。マスカラばっちりのつけまつげが揺れる。カナエは姉御肌あねごはだなタイプなのかな。

「勉強は？」

ヨーコがぼそりと言う。

「う……勉強だけは勘弁かんべん」

カナエが肩をすくめた。

「カナエ、頭は悪くないんだから、ちゃんとやればきつといい点取れるのに。授業中寝てばかりいるのが、ダメなんだよ」

「ヨーコちゃんは手厳しいなあ……これからは頑張がんばるって。そういうことだからサツキ、ノートのコピーとかは秀才のアツシに頼んでね。できれば、そのコピーをあたしにもちよう дайね」

「お前もコピーいるのかよ……まあ、いいけどさ」

アツシが苦笑する。

アツシは短髪を焦げ茶に染めた、好青年だ。整った顔立ちで、清潔感がある。食事が終わったら練習でもするのか、脇にテニスのラケットケースを置いていた。

「自分でノート取らないと、身につかないよー？」

ヨーコが言う。

「俺いつも思うけど、ヨーコちゃんは、ほんとオカンみたいだよなあ……体はちっちゃいのに」

「いやいや、私は君たちのために言ってるんだよ」

「うん、そういうところがオカンなんだよね」

アツシが言うと、みんなが笑った。

周りに友達がいると思うと、授業中も楽しい気分になる。

五限の古文で居眠りしているカナエとか、六限の数学で難しい問題を鮮あざやかに解くアツシを見て、私はなんだかわくわくした。

やっぱり、友達がいるっていいな。これまでは誰が何をしよう、関係なかったもの。授業は先生の話を聞くだけ、テストは淡々と解答を書き込むだけ、孤独で単調な世界だった。

ヨーコのおかげだ。そう思いながら、ノートにペンを走らせた。

帰りのホームルームが終わった。

ヨーコは数学の先生に聞きたいことがあると言って職員室の方に向かい、アツシはテニス部のジヤージを羽織^はって、何人かの男子と一緒に飛び出していった。一人で帰ろうとしていると、カナエとハルナが話しかけてきた。カラオケに行かないかと言う。

「ごめん、今日は早く帰って夕飯の支度しないといけないんだ」

私が答えると、カナエが驚いた。

「へー、サツキがご飯作ってるの？ 凄いね！」

「毎回じゃないけどね。両親が共働きだから、交代で作ってるの」

「女子力高っ！ いやー、でもしつくりくる。サツキって、何ていうか清楚^{せいそ}だもん。三角巾と割烹着^{かつぽうぎ}が似合う、和風美人って感じ」

「そんなことないよ。別に大したものも作らないし」

「ふーん。ちなみに今日のメニューは？」

私は頬^ほにひとさし指を当てて考える。大根が少し残っていた。あと、ひき肉もそろそろ使ってしまわないと、悪くなる。

「うーん、大根のひき肉あんかけ煮……とかかな……それと、煮物とお吸い物」

「いやいや、十分本格的だから！ しつかし凄^すいなー、かつこいいよ。あんかけて！ 材料が何かもわからんわー。あたしなんて、飯は大抵マックとかだし、アハハ」

カナエは大きな声で豪快に笑う。

「……おいしそう……」

唾^{つば}を呑^のみこむ音を立てたのは、ハルナ。

「ううん、こんな料理、簡単だよ」

本心からそう言ったのだが、カナエはぶんぶんと手を振った。

「無理無理。あたし絶対無理。手先が不器用だからねー。でもカラオケとかダーツなら負けないよん。あ、ゲーセンの太鼓^{たいこ}のやつも、得意だよ！ 鬼モード^{おに}クリア余裕だし、今度やろーよ」

「鬼モード……？」

今度は私にわからない単語が出てきた。カラオケも、ゲーセンもほとんど行ったことがない。ダーツなんて、ルールもわからない。

「教えてあげるから大丈夫ー。あたしたち渋谷行くから、途中まで一緒に帰ろうよ」

「う、うん」

「……ね、カナエ。未来軒^{みらいげん}のコロッケ、食べてかない……」

「ハルナ、あんたは食えることばかりだねー。まあいいけど。さ、サツキ、行こ」

カナエは大口で歩き出す。スカートが揺れ、レースのついた黒い下着がちらつと見えた。

家に帰ってすぐ、お米を研いで炊飯器にセットする。

お鍋にジャコと昆布こんぶを入れて水に漬け込み、出汁だしの下準備。時計を見る。四時。もうしばらくたつたら、調理を始めよう。

私は携帯を見る。ライトが明滅していた。アプリの通知だ。

ヨーコ … やっほー。『二年B組』のグループ招待しといたから、覗いてねー

チャット形式で文章のやり取りができるアプリで、メッセージが届いていた。昼休みに何人かとIDを交換していたのを思い出す。私は返信を書き込む。

藤代皐月… ありがとう。見てみるね。

私の返信に既読マークがつく。ヨーコが私のメッセージを開いたのだ。同じ時間、違う場所で、ヨーコが携帯をいじっている。

私は、招待された『二年B組』のグループチャットを開いてみた。そこには、三十六人の参加者が登録されていた。クラス的人数は三十五人。私は参加者のハンドルネームを目で追っていく。

ヨーコはもちろん、二年B組の全員がこのチャットに参加しているようだった。生徒だけでなく、担任の先生も入っているというのにはびっくりだ。

凄すごい参加率だなあ。クラスの繋がりが強いのだろうか。

前の学校でもグループチャットはあったが、仲良しグループで個別に作っているだけで、クラス全体のものはなかった。担任が入っているグループチャットも、初めて見た。学校によるのかもしれない。

藤代皐月… 転校生の藤代です。皆さん、よろしく願いますね。

ばらばらと私の発言に既読カウントがついていく。何件かメッセージも返ってきた。

Kana江… サツキ、よろしくーん☆ カラオケなう笑

あつし … よろしくな

ヨーコ … みんな、歓迎しよう！

私はみんなのコメントを読む。なんだか和む。
アットホームなクラスに入れて良かったなあ。

しかし、ある程度「よろしく」のコメントが書き込まれると、その後は静かになってしまった。
雑談などもない。

ヨーコ .. 「二年B組」のグループは、たまに連絡事項とか来るから、通知はオンにしろくとい
いよ。雑談は基本的にはないから、邪魔にはならないはず。ちなみに雑談なら、「B組
雑談用」っていうグループがあるみたいだから、そっちを使ってね

ヨーコから個別のメッセージが来た。これは私とヨーコの一对一のチャットなので、グループの
メンバーには見えない。

言われるままに、私は「B組雑談用」というグループを探す。検索すると、すぐに見つかった。
そこにも入っておく。

藤代皐月.. 教えてくれてありがとう。でもどうして、雑談は別なのかな？

ヨーコ .. だって担任まで見てるような場所で、雑談なんてしにくいでしょ（笑）

藤代皐月.. あ、そっか。「B組雑談用」は、生徒だけなんだね。

ヨーコ .. そういうこと。「B組雑談用」は、クラスメイト全員は入ってないからその点注意ね。
私も入ってないし。ま、適当に使い分けちゃってくださいなー。じゃあね！

藤代皐月.. うん。ありがとう。

私は笑顔のマークのスタンプを送信して、ヨーコとのチャットを終える。なんとなく、クラスの
様子がわかってきた。担任と生徒の距離は近くて、グループチャットで気軽に連絡事項も回せる。
一方、生徒同士で個別にやり取りもする。担任はそれに理解を示し、必要以上に介入しない……。
そんな感じなのかな。

前の学校では、このアプリ自体禁止だったのに。携帯の持ち込みが禁止の学校もあった。私は、
こちらの方が居心地がいい。
そろそろ五時になる。

大根の下煮を始めようかな。

そう思った時、アプリが通知ライトを光らせた。

「B組雑談用」のグループに、新しいメッセージだ。

思わず眉をひそめる。

どこかのHPのURLだけが張られたメッセージ。差出人は「あ」。知らない人だ。クラスのみなのハンドルネームと見比べてみるが、「あ」というクラスメイトはいない。適当な名前からすると、捨てアカウントなのかもしれない。

イタズラだよ。クリックしたら、怪しいサイトに飛ばされるかも。

私はそのメッセージを無視して、夕ご飯の支度に取りかかった。

翌日の放課後。美術室の扉を開けると油絵の具の臭いがした。

「あれ、転校生の……」

私を見た相川さんは、絵筆を止めた。

「こ、こんにちは。あの、相川さん……ですよね。よろしくお願いします」

相川さんはくすつと上品に笑う。

「あ、いやいや。敬語は、やめよ。同じクラスじゃない」

「ご、ごめんなさい」

誰にでも敬語で話しかけ、壁を作ってしまうのは私の悪い癖だ。

「それから、私のことなら名前前で呼んでくれていいよ。相川マユリ、マユリでいいから。サツキも美術部、入ることにしたの？」

「う、うん」

どきどきする。今まで部活なんて入ったことがなかった。

「そうなんだ。うちの美術部は少人数だから、のんびり描けて楽しいよ。っていうか……B組の生徒しかいないんだけど。顧問も陣内先生だしね。B組の担任の」

「じゃあ、ほとんどB組みたいなものだね」

「そういうこと。入部届は、もう出した？ まだなら、美術準備室に用紙があるから、書いて陣内先生に渡して。あ、もしくは部長の私に渡してくれたら、後で陣内先生に……」

「あ、大丈夫。ついさつき、職員室で出してきたの」

「ふうん、なるほどね。……ひょっとして入部しようと思ったのも、陣内先生に誘われたとか？」

「うん」

「あはは、やつぱりか。陣内先生、誰でも誘っちゃうんだよね。私なんて、出席番号が一番だからって、最初に声かけられたし。あの人ちよつとウザイよね。私、あまり好きじゃないんだ」

マユリはふうと息をつく。

「ま、このまま部員が減ると部活消滅の危機だから、助かってるけど……活動日は、火木金。なるべく週に一回は顔出してね」

マユリは説明しながら、紙パレットにチューブからイエローオーカーを出した。目の前のカンバスには、ガラスの花瓶が描かれている。細身のマユリは、腕も胴も細く、白い。ショートカットなので首筋が露わになっているが、折れてしまいそうな印象だ。しかし、その絵は何とも言えない力強さに満ちていた。

上手だなあ。私は目を見はった。

「サツキはどんな絵を描くの？」

「うーん、絵自体そんなに描いたことがないんだけど……建物を描くのが好きかな。家とか、ビル」

「えー、難しくない？ 柱とか、ごちゃごちゃしてるし」

「そこが好きなの。それに、ガラス瓶の方が、描くの難しいと思うよ」

「そうかなあ。私、透明なものの描くの大好き」

マユリと話していると、美術室の扉が開いた。あたりを窺うようにして一人の女子生徒が顔を覗かせる。ボブと言うのだろうか、まるっとした髪型。

目が合い、クラスで見た顔だ、と思った。

しかしその子はサツと目をそらし、俯いたままびくびくと中に入ってきた。教室の隅を歩き、自分の画材を取る。身を縮こませたその姿は、何となくウサギを思わせた。

「トモミ、サツキも美術部入ってくれたよ」

マユリがペインティングオイルを油壺に入れながら、声をかける。トモミは私をちらと見て、ほんの少し頭を下げた。それから小さな声で「よろしく」と言った。その間、一度も目は合わなかった。トモミの顔は真っ赤に染まっている。

「よろしくね」

私はそう言う。トモミは答えず、こちらに背を向けたままイーゼルを組み立て始めた。

「ごめんね、トモミって凄く恥ずかしがり屋なんだ。本人に悪気はないんだけどさ」

マユリが申し訳なさそうに息を吐いた。

「ううん、気にしてないよ」

「ありがと、サツキ。さっそく絵、描く？ 油絵ならカンバスと絵の具が準備室にそろってるよ。水彩はアクリル絵の具だったら奥に……」

「アクリル絵の具って何？ 私、絵は授業でしかやったことなくて。使ったことない」

「あ、そうなんだ。じゃあ使い方とか教えてあげるよ。ええと、そうね、ちょっとキリのいいところまで描いてからでもいい？」

マユリが前髪をさつと指でかきあげる。ボーイッシュなその横顔に、どきりとした。

「うん、もちろん。ありがとう」

「オッケ。それじゃその画集でも見て、ちょっと待ってて」

今度は、絵筆を口にくわえて腕まくりをした。マユリのその仕草は、いかにも芸術家という感じで恰好いい。

「うん。ちょっとトイレ行ってくるね」

私は荷物を置いて、歩き出す。

「女子トイレ、出て右だよー」

後ろから声がかけられる。

出口で一度振り返ると、一心不乱に絵筆を動かしているマユリが見えた。その脇でトモミが果物を並べてモチーフの用意をしていたが、私と目が合うとびくつと震え、すぐ目をそらした。

トイレには私以外、誰もいなかった。

窓から日光が差し込んでいる。宙を浮かぶ埃が照らし出されて、きらきら光って見える。暖かかったが、それでも少し前に比べれば日差しは随分弱々しくなった。窓から見える、正門前のイチヨウが色づいている。

個室に入ると、扉の裏側に落書きがあった。

相合傘や、教師の悪口に紛れて、それは私の目に飛び込んできた。

サイト二年B組 <http://xxxxxxxxxxxxxx.jpg> (携帯only)

見覚えのある文字列だった。私は携帯を取り出して、メッセージの履歴を確認する。間違いない。昨日「あ」という差出人名で送られてきたのと同じURLだ。

私は意味もなくあたりをきよろきよろする。

昨日のメッセージは、私が「B組雑談用」グループチャットに入った途端に送られてきた。このトイレも、B組の教室と同じ階にある。

その落書きの下には、うっすらと同じ文字列が重なって見えた。清掃で消されても、何度か上から書き直しているらしい。

このサイトを見ろ。

そう、誰かが私に執拗に迫っているような気がした。

おそらくは、クラスメイトの誰かが。

何だか嫌な気分になり、私はすぐに個室を出て、隣の個室に入った。

そこにも、同じ落書きがあった。

美術部の活動は、下校のチャイムで終わる。

運動部と違って全体練習などはないので、それぞれが自由に創作物を作り、たまにおしゃべりする程度のゆるやかな活動だ。マイペースな私には丁度良かった。マユリが言っていた通り部員は少なく、今日はマユリとトモミと私の、三人しか美術室に来なかった。

「トモミ、サツキ。一緒に帰ろ」

マユリが道具を片付けながら言った。外はすでに暗く、家々には明かりがついている。

「うん。ちよつと待って」

私は広げていたアクリル絵の具の画材を片付け、水道で絵筆を洗う。使い慣れていないので、手間取ってしまう。すると、横からトモミがそつと手を差し出した。

トモミはこちらを見ていない。ただ手だけを出している。その意図がわからず、私はぼんやりとトモミの手と、顔を交互に見る。

トモミは黙ったまま、ゆつくりとした動きで私の手から絵筆を取った。そして蛇口をひねると、水流にさらしながら、筆の先をつまむように洗い始めた。

「……」

「え？」

物凄く小さな声で、何か言っている。私は耳を近づけた。

「サツキのやり方だと、根元が痛むから……こややって、優しく……洗うと、いいよ」

トモミは俯いて顔を赤くしながら、そう言っていた。教えてくれていたのだ。

「あ……ありがとう」

私がそう言うと、トモミはびくつと震え、恥ずかしそうに何か言った。言葉は聞き取れなかったが、眉が八の字になっているのが見えた。

トモミ、いい人じゃない。最初は嫌われているのかと思ったが、そんなことはなかったようだ。

私とトモミは、並んで一緒に絵筆を洗った。トモミが手伝ってくれたおかげで、片付けはすぐに終わった。

マユリやトモミと一緒に駆までの道を歩く。

「少しずつ、秋になってきたね」

ひゅうと冷たい風が吹いた。お日様が出ている間は暖かいのに、夜になると寒い。マユリはプールのマフラーをイタリア巻きしている。背も高くて、男の子みたいだ。赤い唇から吐かれる白い息が、妙に色っぽかった。

「そうだね」

私は答えながらトモミを見る。トモミは白のファアがついた耳当てと、茶色の手袋をつけている。温かそうだなあ。目が一瞬合ったが、トモミは目を伏せてしまった。

「あ、そうだとモミ」

マユリが言う。トモミは首をすくめると、目をきよきよささせた。何をそんなに怯えているのかと思うが、どうもこれが彼女の癖らしい。マユリは気にせずに続ける。

「このメモ、私の鞆に入れたの、トモミ？」

マユリは切符ほどの大きさの、白い紙切れを出して示した。トモミはそれを見るが、すぐに不思議そうな顔で手を横に振って否定する。

「えー……じゃあ誰だろ。私、こういうことする友達ってそんなに心当たりないんだけどな」
私もその紙片を覗き込む。そして、はつと息を呑んだ。

サイト二年B組 <http://xxxxxxxxxxxxxx.jp> (携帯 only)

紙にはボールペンで、それだけ書かれていた。

「あれ？ これひょっとしてサツキ？」

「あ、いや、違うの」

私は首を振る。

「ただ、似たような落書きを今日、トイレで見えて……」

「ふーん……誰かと間違えられたのかなあ」

マユリは首を傾げる。そして「ま、いつか」と言って紙切れを丸め、コンビニのゴミ箱に放り込んだ。私はどきどきした。

嫌な感じがした。知らないところで、何か恐ろしいものがクラスに近づいてきている。そんな予感がした。

「じゃ、サツキ、また明日ね」

路線が違うので、途中で二人と別れる。手を振ってくれるマユリと、照れくさそうに笑顔を向けてくれるトモミ。

二人にさよならを言いながら、私は携帯を握りしめていた。

「サツキ、学校はどう？」

夕食のポトフを啜りつつ、お母さんが私に言った。

「うん、楽しいよ」

「すまんなあ、転勤ばかりで……」

お父さんは私を見て、しみじみと言った。

「ううん、大丈夫」

両親は笑顔だったが、私を心配しているのがひしひしと伝わってくる。

「クラスの友達もできたし、部活も始めることにしたんだ」

私が言うと、二人とも少し驚いたようだった。それから、にっこりと笑った。

「それは良かったなあ」

「何の部活？」

「美術部だよ。部員がみんなB組だし、顧問もB組の先生だから、やりやすいんだ」

「へえ、美術部か。芸術的な素養が全くない俺に、美術部の娘ができるとはな」

「クラスにも、友達が？」

両親はかわるがわる私に話しかける。

「うん。アツシとかカナエは、面白いよ。カナエは座学は苦手なくせに、体育だけ凄く張り切るの。アツシはどっちも得意でかっこいい。そうだ、お爺ちゃん（じいちゃん）のシャンプー、お試しのやつ余ってるかな？ ハルナとカナエが、欲しいって言ってたの」

「ああ、試供品ね。まだいくつもあったよ」

「良かった。それからね、一番最初に声かけてくれたのは、ヨーコなんだ。ヨーコって凄く社交的で、凄い人だよ。あのね、名前で呼び捨てでいいって、いきなり言われたの。面白いよね」

両親を心配させないようにと思って話し始めたのだけど、話しているうちにだんだん楽しくなり、止まらなくなる。

「でね、ヨーコってばちっちゃくて、体型は小学生みたいなのに、言うことはオカンみたいなんだよ。どこか説教くさくて。アンバランスで、おかしいの」

私は笑う。お母さんが私を見て、微笑んだ。

「サツキ、明るくなったねえ」

お風呂を上がって、パジャマになる。あとは寝るだけだ。

私は自分の部屋で携帯を持ち、アプリのメッセージ履歴を眺めていた。

サイト二年B組 <http://xxxxxxxxxxxxxxxxx.dj?xxxxxxxxx> (携帯only)

そのURLはリンク可能であることを示して青く光っている。あとは決定ボタンを押しさえすれば、サイトにジャンプできる。

早めにこれが何なのか確認したいと思った。でも私は画面を見つめたまま、躊躇^{ちゆうちゆう}している。嫌だなあ。見たくない。

見てしまったら、もう戻れないような気がする。せっかく新しいクラスでたくさんの友達ができ、楽しく過ごせそうなのに、それが全部ぶち壊しになってしまうように思う。

でも、サイトの内容は気になる……。

私はしばらく迷ってから、部屋の電気を消した。真っ暗になり、外の道路を行き交う車の音がやけにクリアになる。ベッドに潜り込んで、目をつぶる。

眠れない。

はあ。

私は布団の中から手をのばして携帯を掴む。

そして、決定ボタンを押した。

☆ようこそ☆

ここは日木日月学院二年B組の学校裏サイトです

関係者以外立ち入り禁止！ パスワードは担任の苗字^{みょうじ}の画数です

パスワードを入力する「」

数秒の読み込みの後、簡素な文章が表示された。

やっぱり、裏サイトだった。私はため息をつく。

今までの学校にも裏サイトはあった。いじめられっ子の悪口がいっぱい書かれているような裏サイトもあれば、教師や先輩の批判^{ひはん}で埋め尽くされた裏サイトもあった。ひどいになると、女子の隠し撮り画像が大量に載せられている、なんてものもあった。

このような非公式に内輪で楽しむサイトは「学校裏サイト」と呼ばれ、イジメなどの温床^{おんじょう}になることから、学校側の依頼で削除されてしまうことも多い。でも大抵の場合は、監視の目をかいくぐって生き残っている。フリーHPサービスなどを使えば、誰でも無料で簡単に作れるのだ。削除されるわけではない。

私は文章の一部を見る。

日木日月学院……これは、私たちの学校「東明^{とうめい}学院高等学校」のことだろう。こんな風に漢字を分解してサイトに使えば、教師たちが学校名で検索しても、裏サイトに辿^{たど}りつけない。そして、パスワードが担任の苗字^{みょうじ}の画数。これは学校の関係者じゃないと簡単には調べられない。全くの外部の人は、パスワードを知ることができない。

大人の目からも、部外者の目からも隠れた、完全に生徒たちだけの秘密空間。その中で行われる

のは、真面目な生徒という表皮を捨て去った、生の人間のどろどろとした欲望のぶつかり合いだ。
「このクラスにも、裏サイトあるんだ……」

思わず独り言が出てしまった。

そういうクラスではないと思っていた。みんな朗らかで優しい、楽しいクラスだと思っていた。
だから、こうして確認するのが怖かったのだ。

でも、仕方ないのかな。

私はクラスのメンバー全員を知っているわけではない。中には、こういうことをする人もいるのだろう。渡り歩いてきた学校にも、大抵の場合裏サイトはあった。ないことの方が珍しい。

私はおそろおそろ、パスワードの入力部分をタッチする。陣内。画数は……私は空中で陣内の文字を書く。……十四。そう打ち込んでOKボタンを押すと、画面が進んだ。

パスワードが承認されました

ここは伝道師のサイトです

あなた方に伝道したいと思って作りました

ここでは全てが露わになります

隠している秘密も 消したい過去も

■スレッドを見る

■新規スレッド作成

■スレッド検索

「ひっ」

私は携帯を顔から遠ざける。黒い背景に赤文字で、妙な文章が出てきた。嫌だなあ。こんなことを書く人がクラスにいるなんて、気味が悪い。

私は気を取り直し、書き込みを眺めていく。

名無し ……ミチノリがカナエに告白して断られたってマジ？

名無し ……それデマだろ。適当こくなバカ

名無し ……いやメールでこったらしいよ。スルーだったとか

名無し ……メールかよwww それじゃダメだろwww

名無し ……カナエって意外と硬派だよな。おっぱい見たい

名無し … 古文の前田^{まえだ}って絶対カツラだよな キモ
名無し … そんな前田も妻子持ちという事実……
名無し … 奥さん若いんだよな確か 前田は勝ち組

自分勝手な匿名^{とくめい}の書き込みがいくつも並んでいる。

名無し … それより転校生が意外と可愛い件^{かわい}について語ろうぜ
名無し … →本人の自演
名無し … 正直付き合いたいです 黒髪高身長最高です
名無し … 胸すげー小さいけどな、乳首黒いし
名無し … 見てきたようなことを言うなww

思わず自分の胸に手をやり、それから顔に血が上る。恥^{かたじけ}ずかしさと、腹立たしさだ。それから諦^{あきら}めのため息をつく。裏サイトとは、こういうものなのだ。

名無し … そういや転校生、ヨーコと仲いいよな

名無し … ヨーコから話しかけてたの見たよ
名無し … ヨーコは世話焼きだからな。悪く言うとは人気取りに必死なカス
名無し … ヨーコうざい 消えてほしいマジで
名無し … あいつ馴れ馴れしすぎるんだよ 立場わきまえて距離置けって思う
名無し … 乳首黒いといえば絶対ヨーコ
名無し … でも外見は口リ巨乳そのものだよ
名無し … 説教くさい口リ巨乳なんかいりません
名無し … いや、むしろ最高だろ……

何、勝手なこと言ってるんだろう。

自分をとにかく言われるのも嫌だが、親しい人がネタにされるのはもっと嫌だった。

名無し … しかし、この裏サイト誰が作ったんかね
名無し … 知らん。俺は友達に教えてもらった
名無し … できたばかりみたいだよな、書き込み数少ないし
名無し … 匿名^{とくめい}メッセージでURL来たぞ 誰かこっそり広めてるんじゃない？

名無し …女子の人気投票しませんか

名無し …人気投票いいな 男はやってもアツシの一強でつまらん

名無し …アツシはイケメン

名無し …→こいつアツシじゃね？

見ているうちに、どんどん辛くなってきた。胃のあたりがずっしり重くなり、気がめいる。もうやめよう。見なかったことにしよう。そして、二度とサイトにアクセスしなければいい。そうすれば、変わらない楽しい学校生活が続く。

そんな風に思い始めた時だった。

名無し …何人くらいこのサイト知ってんだろ？

名無し …→気づいたか…実はお前以外、ぜんぶ俺の書き込みだ

名無し …冗談はいいからw

伝道師 …ここは伝道師のサイトです

名無し …実際、結構な割合でクラスの奴は見る気がするけどな

名無し …ヨーコの乳首は黒乳首 干し葡萄

伝道師 …あなた方に伝道したいと思って作りました

何だろう。突然変な名前での書き込みが現れた。

伝道師 …ここでは全てが露わになります

名無し …コテハン？

名無し …コテハン連投うざい

コテハンとは固定ハンドルネームのことだ。名前欄に「伝道師」とハンドルネームを入れて書き込みをしている人間がいる。名前欄に何も入力しなければ、ただ「名無し」と表示される。ほとんどの人は、こういうサイトには名無しで書き込むものだが。

伝道師 …隠している秘密も

名無し …どっかで見た文章

名無し …サイトトップにありましたね 管理人さんですか？

伝道師 …消したい過去も

名無し .. 荒らしでしょう

書き込みはリアルタイムで並んでいく。

他のサイト閲覧者も困惑している。

伝道師 .. それでは、いきます

伝道師 .. <http://xxx/uploda/xxxxxx001.jpg>

そして、唐突にURLが表示された。画像などをサーバー上に保存する、アップローダーのURLだ。私はうつぶせになり、携帯を覗き込む。

名無し .. 何？ グロ画像でも上げたの？

伝道師 .. 一つ目の伝道を始めます。黒乳首は不正解です

伝道師 .. <http://xxx/uploda/xxxxxx002.jpg>

伝道師 .. <http://xxx/uploda/xxxxxx003.jpg>

何これ。何これ。眉間に皺が寄っていくのが分かる。

伝道師 .. 画像の説明です。一枚目、小学四年生の本人です。二枚目、小学六年生の本人です。

見ての通りです。上向いた団子鼻、むくんだ頬、張り出した頬骨。体重六十キロ超え。

また、胸の成長が早く、デブ+苗字という、お決まりの組み合わせでの暴言を同級生から浴びせられていました。本人が自分を「ヨコ」と名前で呼ばせたがるのは、そのあたりに原因があるかもしれません

伝道師 .. 三枚目、中学一年生の本人です。見ての通り、一変しています

名無し .. グロ画像じゃないぞ。これヨコちゃん本人じゃね

名無し .. 小学校の画像、ヨコの面影あるな

私は画像URLをクリックしたい欲求に駆られる。どんな画像が出てくるのだろう。しかし、「伝道師」の思い通りになるのも嫌で、ためらう。「伝道師」の投稿は続く。

伝道師 .. <http://xxx/uploda/xxxxxx004.jpg>

伝道師 .. <http://xxx/uploda/xxxxxx005.jpg>

伝道師 : <http://xxx/uploda/xxxxx006.jpg>

伝道師 ..画像の説明です。四枚目、ヨークコの利用した美容整形外科です。五枚目、ヨークコの手術明細書です。施術内容がわかります。鼻縮小術、鼻先修正、まがて一重に、あご顎・ほおほね頬骨の修正、脂肪しぼうの吸引、唇にグロスを注入、ほお頬にビタミンC注入。さらに、施術結果写真をチラシに使うことを条件に大幅な割引がされています
伝道師 ..六枚目。その結果が掲載されたチラシになります。目線は入っています。乳首はピンク。繰り返しますが黒乳首は不正解です

「嘘だよ」

私は思わず声に出していた。

名無し ..マジ？ 整形？ ヨークコが？

名無し ..画像見ろよ、間違いないぞ

名無し ..中学生でそんなにきんのかよ

名無し ..うわー ヨークコ……マジかよ引くわ

「嘘。絶対嘘！」

私はURLをクリックする。嘘に決まってる。出鱈目だ。でたらめ全然違う画像に決まっている。そうだ、絶対嘘。

ロードの後、画像が表示されていく。

「嘘……」

表示された画像を見て絶句する。

小学校時の画像は、髪型も違うし、表情も暗い。今よりずっと太って見える。だけど耳の形や、口元の感じ、全体的な印象は確かにヨークコだった。何より写真の下に、ヨークコの名が書かれている。卒業アルバムか何かから取ってきた画像らしい。

整形後……つまり、中学生時の画像は、今とほとんど変わらない。髪が長く、セットの仕方までいぶ違うが、ヨークコだ。私に明るく話しかけてくれたヨークコ、そのものだ。

信じられない。

美容整形外科の写真。薄暗い雑居ビルの奥に、横文字の病院の名前。

手術明細書。年齢が十三と記入されている。施術内容。一重ひとえ瞼化で四十万、腹の脂肪しぼう吸引が十八万、鼻縮小術十五万、鼻先修正十万、あご顎・ほおほね頬骨修正十五万、唇グロス注射二万、ビタミンC注射二万……計、百二万。六十万の割引きで、四十二万円。

頭がくらくらする。これを、ヨーコがやったと言うのか。記載されている名前は確かにヨーコの本名だ。それでも、受け入れられない。

六枚目の画像は、もっとショッキングだった。

目線を入れられ、パンツ一枚のヨーコが、載っている。施術前・施術後で脂肪しぼうの量を比較されたその画像は、ヨーコの深い劣等感と、悲しみを象徴しているようだった。

どうしてそこまで。
どうして。

名無し …六枚目、おっぱいでてんじゃん！ これ中学生のおっぱいってわけかよ？

名無し …保存しよつと。

名無し …確かにヨーコの乳首ピンクだったわ

やめて。やめてよ。

名無し …整形かーw あいつ空回ってるもんなw なんか妙に納得だわ

名無し …実際、やりそうな性格だよ

名無し …よく調べたな、これ

名無し …気づかないもんだな、すげえ整形って

名無し …整形した割に、そこまで美人になってないのが残念だな

伝道師 …今回の伝道は以上となります。

名無し …なんかすげーな

伝道師 …それでは

そこで、「伝道師」の書き込みは途切れていた。その後には、ヨーコを中傷するような書き込みや、伝道師の発言に困惑するような書き込みがいくつか、並んでいく。

ひどい。私は携帯を置き、顔を覆った。

あんまりだ。どうして、何の恨みうらみがあってこんなことをするのだろう。

ヨーコの秘密、おそらくは誰にも知られたくなかっただろう秘密を暴露した。それも、クラス中に向けて。「伝道師」を名乗る人間の悪意が重くて、暗くて、吐き気がしてきた。

ヨーコが一体何をしたって言うの？ 別に整形しようが、何だろうが、いいじゃない。私にヨーコは優しくしてくれたし、クラスの人にも慕したわれている。それでいいじゃない。

わざわざ、秘密を暴かなくて……。

私は顔から手を離す。ヨーコの気持ちを思うと、少しだけ涙が出た。

ヨーコはこれを見ているのだろうか。見てしまったのなら、どうしているのだろうか。私はヨーコに電話をかける。もう夜中だけど、ヨーコが心配でしかたなかった。

コール音が一回鳴った後、メッセージが流れる。

「ただ今電話に出ることができません。改めておかけ直してください」
だめだ。拒否されてる。

もう一度かけても、同じだった。

何度かけても、同じだった。

翌日の教室は、いつもと変わらないように見えた。

アツシが「おはよう」と挨拶あいさつをしてくれ、日直のカナエが黒板を拭ふいている。ハルナはコンビニの肉まんを食べていて、マユリとトモミは美術の本と一緒に眺めていた。

ヨーコの姿はなかった。

私は席について鞆かばんを置きながら、ヨーコを探す。教室のどこにもいない。何人かの生徒が携帯を交互に見せ合い、にやにやしているのが目についた。ひよっとして、裏サイトを見ているのではないか。

朝のホームルームが始まる直前になって、ようやくヨーコは現れた。

「みんな、おはよう」

入口でいつものように挨拶あいさつをしたが、その表情はどこかぎこちなかった。

何かに怯おびえるような、緊張を含んだ視線で、教室を見回している。

私には、ヨーコの気持ちがわかった。

あれは、確認しているのだ。ヨーコは間違いなく裏サイトを見た。そして、自分の秘密が明らかになったことを知っている。知っていて、みんながどんな反応を向けるか、それを窺うかがっているのだ。怯おびえながら。震えながら……。

「……整形」

声が出た。ヨーコがそちらを見る。誰が言ったか、わからない。

教室の端で、ヨーコを指さす者がいる。くすくすと笑い声を立てる者がいる。好奇に満ちた目で、じつと見つめる者がいる。ヨーコは目を伏せ、ゆっくりと教室の中に入ってくる。

「おはよ、ヨーコ！」

私は大きな声でヨーコに呼びかけた。少しだけ室内がざわつく。

大丈夫だよ、どんな秘密を知っても、私は変わらないよ。そんなことでバカにしたりしないし、態度を変えたりもしないから。それをはっきりと伝えたかった。

ヨーコは私を見て、ほっとしたように笑った。

朝のホームルームが終わると、ヨーコは教室を出て行った。すぐに一時間目が始まってしまふ。私は立ちあがり、後を追った。

「ヨーコ」

廊下で追いついて、声をかける。ヨーコは振り返ると、言った。

「……心配してくれたの？」

気づくと、アツシやカナエもそばにいる。みんな追ってきたのだ。

「あの、ヨーコ……」

「裏サイトのことなら、心配いらないよ」

私が言う前に、ヨーコは口にした。

「あれ、本当のことだしね。明細とか写真も本物。うちにあったものなんだけど……誰かが、盗み出したみたいだね」

そして、自虐的に笑ってみせた。やはり、事実なのか。

「昔、私……いじめられてたんだ。小学校から、ずっとね。それが凄く嫌だった。本当につらかった。だから、整形……したんだよ。怖かったけど、そうすれば全部解決すると思ってさ。みんなに

知られたのは、予想外だったけど……でも整形は、自分で決めたことだから。後悔はしてないの」

そう聞いて私は、ヨーコの顔をまじまじと見てしまった。綺麗な目尻。ちゃんと小さな、整った鼻。柔らかそうな頬、そして大きな胸と、くびれた腰。整形なのか。メスで切り、注射を打ち込み、脂肪を吸引したのか。

「それに……ばれちゃったものは仕方ないし」

ヨーコはこちらを見ていない。視線を合わせず、下を向いている。アツシやカナエはヨーコを心配そうに見ているが、何も言えない。

「それにしても、みんな裏サイト見てるんだね……」

ヨーコがつぶやいた。

「ヨーコちゃん、俺たちは気にしてないから……あんなの、ほっとけよ」

アツシが言う。カナエもうんうんと頷いた。

「だから、大丈夫だって」

ヨーコは弱々しく言う。強がりにしか聞こえない。

「ごめんね、サツキ。私、こんな人間で、失望したでしょ？」

ヨーコが言った。

「そんなことないよ」

「したでしょ。嘘つかなくて、いいよ。私のこと嫌だったら、明日から無視してくれてもいいから……これまで馴れ馴れしくして、ごめんね」

「してないってば。嫌なんかじゃない。私、ヨーコのこと大切に思ってるから!」

私が大きな声を出すと、しばらく沈黙が続いた。そして、ヨーコが口を開いた。

「……うん。ごめん。ありがとう」

「ヨーコ。今日、一緒に帰ろう?」

カナエが言う。

「大丈夫……うん、大丈夫」

ヨーコは今度は私たちを見て、小さく笑った。

その日から、ヨーコに向けられる視線は明らかに変化した。

それまでは、少し説教くさいけれど真面目な人物として、クラスに受け入れられていたのだが。ヨーコの発言を鼻で笑ったり、バカにしたりする生徒が増えた。

「ちよつと、廊下の掃除、ちゃんとやってるのー? ゴミ、残ってるよ」

そんな風に注意するヨーコ。注意されたのがアツシや、カナエならいい。

「ごめんごめん、ヨーコちゃん。やっつくよ」

二人はヨーコに、前と変わらず接するからだ。しかし、それがヒロタカや、カズキだと違う。

「……偉そうに命令すんなよ」

彼らはヨーコに言い返す。もともと、注意したがりのヨーコを煙たがっていたようだ。

「偉そうになんか、してないよ。掃除は、必要なことでしょう。学校のためにも、自分たちのためにも」

「そうだな、綺麗にしないと。整形して顔を綺麗にするのも、必要みたいだしな」

嫌味をぶつけられたヨーコは、悔しそうに唇をかむ。

「……とにかく、掃除はしておいて」

それだけ言っ、立ち去るのだ。少し目に涙を浮かべながら。

逃げた逃げた、と一部の男子たちは笑う。女子の何人かも、くすくすと笑い声を上げる。言い返せないヨーコの姿を見て、楽しんでいるのだ。

弱いものいじめ。

そう思いながらも、私には「やめなよ」の一言が言えなかった。ヒロタカたちと対立するのが怖かったのが一つ。それから、もう一つ。

心の一つ、引っ掛かりがあった。ヨーコは、本当のことを言っていないのではないかという、引っ掛かりが。

ただ、それをヨーコに問いただしていいのか、悩み続けていた。

裏サイトの書き込みは続く。

名無し .. ヨーコってあいつ、妙に馴れ馴れしいけど、あれって嫌われたくない反動なんじゃね

ーの？ 整形なんかしてるあたり、めっちゃコンプレックスの塊じゃん

名無し .. 確かに。自分のこと名前で呼ばせたがるのも、ちょっと変だよな

名無し .. ブスだからいじめられてたんだろ？ で、もういじめられたくないから、整形して誰

にでも話しかけて、必死で自分の地位を守ってる、的な

名無し .. 無理してるってわけか。必死だな、ヨーコ

名無し .. その分析、当たってそう。実は凄^{すご}い臆病^{おくびょう}なのかもな

名無し .. あいついきなり転校生にタメ語強要してたし。悪いとは言わないけど、ちょっと異常

名無し .. 歪^{ゆが}んでるよな、心が

整形したヨーコを馬鹿にする言葉が、次から次へと書き込まれる。ヨーコに対する陰口^{かげぐち}も増えた。クラスに、嫌な雰囲気^{きんぷい}が満ちていく。

その後、ヨーコはうまくやり過ごしていた。我慢して、受け流し続けていた。

私もできるだけ、休み時間をヨーコと過ごすようにしていた。誰かが一緒だと、面と向かって嫌味^{いみ}を言ってくる奴はいないからだ。同じように、アツシやカナエもヨーコを守ろうと思っていたと思う。しかし、ヨーコの心は確実に追い詰められていた。顔は青さめ、いつもの元気はなくなっていた。そしてある日、爆発した。

「物理の提出レポート、出して。今日が期限でしょ」

昼休み、ヨーコがヒロタカに話しかける。ヒロタカは眉^{まゆ}をひそめて、ヨーコを睨^{にら}む。

「何でお前が来るんだよ」

「私、回収するように町川先生^{まちかわ}に言われたから……」

「まだやってない。つか、存在忘れてた」

そこで、ヨーコのいつもの言い方が出た。

「どうしてやってないの？ 課題は自分の将来のためにやるものでしょ？ ちゃんとやって出さないで、結局困るのは自分……」

「うるさいな、いつもいつも説教くせーんだよ！」

ヒロタカが怒鳴^{どな}った。ほんと机をたたく音がして、クラスの視線が二人に集中する。

「そういうことは、自分がしっかりした人間になってから言ってほしいもんだ。この、整形女。おせっかいなんだよ、母ちゃんみたいだよ」

「でも、課題は」

ヨーコは若干^{じやうかん}ひるみながら、それでも言い返そうとする。

「整形も、将来の自分のためにやったのかよ？ バカじゃねーの？ ブス。そんなんだからいじめられたんだろ、この根暗！ だいたいうつとうしいんだよ、たいして親しくもない癖^{くせ}に、やいのやいの絡んできやがつてさ……」

ヨーコが涙ぐんで、立ち尽くす。

言い過ぎだ。アツシが駆け寄ろうとする。私も立ちあがる。

「お前の両親も、がっかりだろうよ！ 親からもらった体を、好き勝手いじるなんてよ。あ、わかった。お前、両親に愛されてねーんだろ。だから整形なんかするし、いちいちうるさい性格になったんだろ……」

乾いた音が響いた。

ヒロタカの顔が、横に飛ぶ。頬^ほに赤い跡が浮かびあがる。思い切り右手を振り抜いたヨーコが、はっと自分のやったことに気づく。そして震える。

「……ごめんなさい……」

ヨーコは絞り出すようにそれだけ言うと、走り出した。そして、勢いよくドアを開けて外に出て行った。

「ば、暴力振るいやがった！ あの女！ ふざけんな！ 完全に暴力だろこれ！」

ヒロタカが頬^ほを押さえながら、乱暴に立ちあがる。椅子が倒れ、机が揺れた。顔は赤く、表情は歪^{ゆが}んでいる。今にも仕返しに、ヨーコを殴りに行きそうだ。

「待て、落ち着けって」

アツシが走り寄って、必死にヒロタカを押さえる。加勢するように周りの男子もヒロタカをなだめにかかった。

「サツキは、ヨーコちゃんを追ってよ」

どうしようか迷っている私に、アツシが言った。頷^{うなづ}いて、教室を出る。走って階段を駆けおりる。ヨーコの行先には心当たりがあった。

「……やっぱりいた」

校舎裏の駐車場。この時間は教員も生徒もほとんど訪れない、静かな空間だ。陽^ひに熱せられたアスファルト、まばらに見える土、そこから生える野草。ところどころにある花壇、そのレンガの上にヨーコは腰かけていた。

「サツキ」

ヨーコは私を見て、ふっと笑った。泣いている。

「凄いね、私のいる場所わかつちゃうんだ」

「ヨーコって、いつも一階のトイレ行くでしょ。その後ここに寄って日向ぼっこしてるの、知ってた」
「私のトイレなんかチェックしてたの？ ……なんかばつちいなあ」

今度は声を出して笑った。

「チェックしてたわけじゃないけど……」

「サツキってさ、変な記憶力あるよね。いや、観察力かな」

「……そうかな」

「はあ。ヒロタカ君のこと、ビンタしちゃったな。我慢できてるつもりだったのに」

「驚いたよ。ヨーコがあんなに怒ったとこ、初めて見たから」

「一瞬、我を忘れちゃってさ。問題になるかなあ」

「ならないよ。みんな、ヨーコは悪くないって知ってるから」

「だったらいいけど……」

少しの間、沈黙が流れる。私がハンカチを差し出すと、ヨーコは大丈夫と、掌で自分の目を拭いた。いい天気だった。そよ風がふわふわとススキを揺らし、その下で猫が昼寝をしている。

「サツキ。なんか、聞きたいことがあるって顔だね」

「……え？」

「凶星だった？ 顔に出てるよ。……サツキなら、いいよ。何を聞いても。気になってることがあるんだったら」

「でも」

私は逡巡する。聞いていいのだろうか。確信はない。変な邪推をして、ヨーコを傷つけないか、それが怖い。

「いいよ。聞いて。それで、もっと仲良くなれるってこともあるでしょ」

ヨーコは私を見てにっこりした。私よりもずっと小さいのに、どこか大きく見える。もっと仲良くなれる……それなら。

私は勇気を出して、口を開く。

「違ったら本当にごめんね……ヨーコの整形って、両親にやらされたんじゃないの？」

ヨーコははっと口を開いた。それから真剣な顔になって、私を見た。

「……どうしてわかったの」

自分の推測が正しかったことを知る。

「わかったわけじゃないけど。そうかなと思って、ずっと気になって……」

「いつから気になってたの？」

「裏サイトにアップされた、美容整形の明細書を見た時からかな。いくつか、変だなあって」

「変？」

私は頬に人さし指の腹を当てる。こうすると、物事を思い出しやすい。私の癖だ。

「まず単純に、どうやって手術代を出したのかなって思った。学生に用意できる金額じゃないよね。誰かに出してもらったとしたら、両親じゃないかなあって。整形手術は基本的に、未成年の場合は親の同意書が必要。術後にはしばらくギプスが必要なはずだし、手術箇所も多い。家族に隠れてこっそりやるには、金銭的な問題以外にも障害が山積み。……だから、両親の協力があつたんだろうなと思った」

「……それだけ？」

「ううん。整形に理解がある親だっているだろうし、それ自体はそこまで疑問には思わなかった。だけど、手術の内容が気になった」

「内容？」

「明細に、一重瞼化で四十万ってあつたよね。ほとんどの人は、一重から二重に変える手術をする。そっちの方が綺麗になれるって思ってるから。あえて、一重にするのが不思議だった。私、調べたの。二重瞼化手術って安いと一万円くらいからあるよね。でも一重にする手術って少なくて、そして難しい。眼窩脂肪を移動させたり、眼窩隔膜をいじるのはいいとしても……手術跡が残らないように

するのが難しいはず。だから料金も高い。扱ってくれる病院も、少ない。高いお金を払って、難易度の高い手術をして、そこまで一重にしたかった……そのこだわりが、気になった」

「……なるほど」

「それから、鼻縮小術も少し。鼻尖縮小術や、鼻翼縮小術ならわかるの。どちらも日本ではメジャーな手術。日本人は団子鼻に悩む人も多いし……でも鼻縮小って、鼻の大きさそのものを小さくする手術。どちらかというと欧米で流行ってる術式だよ。鼻が高すぎて悩んでいる人が使うような」

「……物知りだね」

「ヨーコの昔の鼻、写真で見ただけど……ごめんね、失礼な言い方になったら。どちらかというと小さい。むしろ、降鼻術を選ぶかと思ったの。なのに鼻縮小術を選んだ。これも日本では扱っている病院が少なくて、やりづらい手術」

「そうだね」

「そこまで考えて、別のことに思い当たった。整形って、色んな目的がありうるんだよね。単純に綺麗になりたいという目的もあれば、別人になりたいってケースもある。他にも、芸能人に似せたいとか、フィクシヨンのキャラクターに似せたいとか。ヨーコは少なくとも、綺麗になりたいから整形したわけじゃないな。そう思った」

「……」

「そう考えると、他の疑問点にも説明がつく。例えば、手術の明細。あの明細って『伝道師』に盗まれるまでは、ヨーコの家にあったんだよね。何年も前の明細を、ヨーコはきちんと取っておいていた。昔の写真もそう。過去の醜い自分を捨てたくて整形した人が、その過去の残滓でもある明細や、写真をいつまでも残しておくのって、不自然だと思ったの。残しておいたということは、ヨーコにとつて整形は過去を切り離す行為ではなく、もつと何か、大事な……うまく言えないけど、例えば過去の証明に近い行為だったのかなと……」

私はヨーコの顔を窺う。

「……続けて」

「うん……。過去を切り捨ててないということは、別人になりたかつたわけじゃないと思う。となると、ヨーコは、誰かの顔に似せるために、手術をしたんじゃないかな。そのために一重瞼化や、鼻縮小が必要だった」

「誰かって、誰？」

「その確証はなかった。詮索するのもどうかと思ってたし……。だけど、誰かに似せるために親が協力したというところが気になるの。どうしてそこまで、親は積極的に支援したのか。低年齢での整形手術は、それからの顔の成長に関わってくるからリスクが高いのに。子供がどうしても誰かの顔に似せたいと言って、親が承諾するだろうか。普通はしない。親が子供を整形しようとして、子

供がそれを受け入れたんじゃないかな。だとすると、親の思惑としてはいくつかのパターンが考えられるけど……。ごめんねヨーコ、推測でこんなこと言っちゃって……」

「大丈夫」

ヨーコは穏やかな目で私を見ている。

「今日、ヒロタカに両親のことを馬鹿にされて、平静を失ったヨーコを見た。何を言われても我慢してきたヨーコが、あれだけは許せなかった。見てて、思ったんだ。おそらく親のどちらかに似せようとしたか、もしくは親にとつて何か大切なものを守るために整形したか……」

「……すごいね、サツキ。やつぱり、サツキって変な観察力あるよ」

ヨーコはふうと息をついた。
そして俯いた。

「そう。私は、父さんに似せるために手術をしたの」

ヨーコは、ぼそりぼそりと、話し始めた。

「私、昔いじめられてたの、不細工だからじゃないんだ。あ、いや、それもあつたかもだけど」

口調は軽かったが、目には深い悲しみをたたえていた。

「本当は、両親がお互いに、浮気してたからなの」

「浮気……？」

「母さんはよそに男を作って、しょっちゅう泊まりに行っちゃうし。父さんは単身赴任先で、やっぱり女を作ってた。そのくせお互いに相手の不貞を疑って、喧嘩ばかり。私、いつも泣いて仲裁に入ってた。そして二人に怒られるの。母さんは同級生の父親にまで言い寄る始末で、私は同級生からビッチの子だとか、言われてた」

「ひどいね」

「ひどいね。うん、ひどい。今だったらそう思えるよ。でもね、子供の狭い世界観では、それがわからないの。私、父さんと母さんが大好きだった。父さんと母さんが、絶対の存在だった。二人に仲直りしてはしなかったし、仲直りしてもらえないのは自分のせいなんじゃないかって、そう思ってた」

「……そうなんだ」

「そのうち、父さんが私を疑い始めた。父さんは数か月に一回だけ帰ってくるんだけどね、そのたびに、私を見て首を傾げるわけ。成長していく私を指さして、自分に似ていないって言うんだ。私が、浮気相手の子なんじゃないかって叫んで、母さんと大喧嘩するの。私はどうしたらいいかわからなくて、ずっと泣いてた。せつかく父さんが久しぶりに帰ってきてくれたのに、遊んでほしいのに、一緒に楽しく過ごしたいのに、悲しくて仕方なかった」

「……」

「ま、バカみたいな話なんだけどね。実際私、母さんの浮気相手の子だったんだから。でもね、その時の私は知らなくて、悩んだよ。鏡を見て、どうして父さんに似ないのか毎日考えた。母さんの面影はあるのに、どうして父さんに似たところはないのか。自分のせいだと思った。自分の努力が足りないんだと思った。父さんの写真を見て、一重瞼ひとえまなこになろうと一生懸命目を動かした。鼻を小さくしようと毎日つまんだし、頬ほおを細くしようと手でこすった。幼稚園に上がる頃から、小学校高学年まで、ずっとそんなことしてたよ……」

ヨーコは少し涙ぐむ。

「私、父さんに似たら、両親が仲直りしてくれるって思ってたんだよ。喧嘩も浮気も、私がお父さんに似てないからだって、思ってたんだよ。バカだよ。私……ほんとに……神様に毎日お願いしてさ。七夕の短冊たんざくにも書いたなあ。お父さんとお母さんが仲直りしますように、私がお父さんに似ますように。クリスマスは、両親はどっちも浮気相手の家に行っちゃうからさ、私は一人ぼっちでも、サンタさんに同じことをお願いしてた。ずっと、ずっとそればかり願ってたんだ」

こらえきれず、ヨーコの瞳から水滴が落ちた。私はハンカチを差し出す。今度は受け取ってくれた。「小学校六年の時かな。いよいよ、父さんが離婚を切り出したんだ。でも、母さんは離婚したくないって言い張った。今から思えば父さんの稼ぎが良かったからなんだけど、私はそこまで思い当たらない。母さんはまだ、仲直りする気があるんだと思ってた。だから母さん頑張れ、頑張れって思

った」

「まさか……」

「そう。母さんは、離婚しないために何でもやった。浮気相手との口裏合わせはもちろん、父さんの雇った興信所を抱き込もうとしたり、ね。そして、私が確かに父さんとの子だって、言い張ろうとした。そのために……私に整形手術を受けさせたんだ」

なんて話だ。私は目をつぶる。

何もわからない子供を、己の交渉のための道具にするなんて。

「私、バカだったから……母さん頑張れって思ってたから……だから、父さんに似せるために整形手術を受けない？ って聞かれた時、ほとんど迷わずに頷いたよ。だってそうすれば、父さんが戻ってくるって思ってたんだ。お金は母さんが出してくれる。お医者も母さんが探してくれる。あとは私がちよつと頑張るだけ。そうすれば、幸せな家庭になる。同級生の家みたいにな、母さんと父さんが笑い合っていて、一緒に動物園に行ったり、レストランに行ったりしてくれる、クリスマスはみんなでケーキを食べて、誕生日にはパーティーをする。そういうおうちになるんだって思ってた……」

昼寝していた猫が、あくびをした。

「……それで、手術したんだ」

やりきれない話だった。

救いがなかった。

「……結局、母さんは私を利用しただけだった。手術はおおむねうまくいったけど、そんなことで父さんは騙されなかった。DNA鑑定を持ち出して、他にも不貞の証拠をいくつも突き付けて、父さんは離婚を勝ち取った。母さんは浮気相手とくっついたけど、相手は大学生で稼ぎがない。結局すぐに破局。懲りずに別の男を見つけて、ほとんど私を捨てるようにして出て行ってしまったの。後には、医学の力で父さんに少しだけ似せられた、私だけが残った」

「そうだったんだ……」

「その後、私は父方の叔父さんに引き取ってもらって、学校に通えるようになった。本当、叔父さんには、感謝してもしきれないよ」

「じゃあ、明細を残しておいたのは」

「捨てられないんだ。あの明細は、小学生だった私にとつて、父さんと母さんが元に戻ってくれる、その証だったの。両親のために一歩踏み出した、自分の勲章だった。母さんはただ、私を利用しただけだって、そう思える今でも……あの明細を見ると……父さんと母さんと私が笑ってる、そんな世界が見えるような気がして……どうしても、捨てられないんだ。バカだよ。ほんと、バカ」

だから、耐えていたのか。クラスメイトに何を言われても、裏サイトで何を書き込まれても、耐えていた。ブスだから整形したというのは、核心ではなかったから。そう誤解されるのは、まだ平気だった。

だけど、両親への純粋な思いに踏み込まれると、我慢できなかったのだ。

そこは、ヨーコの大切な場所だったから。

今もなお、消化しきれない思いが渦巻く部分だったから。

「まだ、未練があるんだろうね。両親に。あんなダメな両親なのに……それでも、まだ愛してるんだよ。夢見てるんだよ。仲のいい両親が、帰ってきてくれるのを。頭では無駄だつてわかっても、心がずつと、そうなんだ。つくづく、バカだよね……」

ヨーコはそう言つて、ハンカチを小さく畳んだ。

「ありがとね、ハンカチ……洗って返すから」

私は何と言つていいか、わからなかった。予想していた話とはいえ、それでも面と向かつて告げられると、苦しい。ヨーコは強いな。そんな過去があつても、前向きに生きている。

私はヨーコに、何をしてあげられるのだろう……。

その時ヨーコが言つた。

「サツキ、聞いてくれてありがとう。ちよつと楽になったよ。今まで誰にも言えなかった話だからさ」

「そんな。私なんて、ただ聞いてただけで……何もできなくて」

「そんなことないよ。ただ聞くて、難しいことだよ」

「そうかな」

「私は確かに、整形という秘密を持つてた。その秘密に群がってくる人はいっぱいいる。でもそうやって好奇心で近づいてくる人つて、わかつてない。整形の秘密の奥に潜んでる、本当の秘密の存在を。私の両親の話まで、受け止める覚悟がない。ただ、表面の面白そうなところに触れたいだけ……私、そういう人、大嫌い」

「ヨーコ……」

「そこまで踏み込む気がないなら、秘密に触れない方がマシ。腫れものを扱うみたいにしてくれる結構だから、無関心でいてくれた方がいいんだ。その方が、楽なんだ」

ヨーコが裏サイトの住人たちを批判しているのが、よくわかった。

「でもサツキは違った。サツキは、私の秘密を知つて、さらにその奥の秘密まで受け止めようとしてくれた。サツキは私を理解してくれたんだよ」

「理解、できてるのかな」

正直不安だった。ただ、私は気になったことを考え、推理しただけだ。それがヨーコを救うことになるのかどうか、わからない。

「できてるよ。私、嬉しかったもの。そこまでしてくれたのは、サツキだけ」

「……ヨーコ」

「みんなも、そうだったらしいのに……無理なのかな。他の生徒たちにそこまで期待するのは、難しいのかな。ヒロタカや、カズキたちにも、他のみんなにも、サツキみたいになってほしいんだ。誰だって生きていくうえで、辛い秘密を抱え込むことがあるよね。そんな時、どうしたらいいかわかってほしいんだけど……」

「ヨーコ。大丈夫だよ。私なら……私で良かったら、ずっとヨーコの味方だから。それに、みんなだてきつといつか、わかってくれる」

「そうだね。まだ、判断するのは早すぎるよね。私……もう少し待ってみようと思う。みんなが、私の秘密を楽しんだりするのを、やめてくれるといいな……」

「そうだね……本当に、そう思う」

ヨーコはこちらを向いた。

そして、申し訳なさそうに言った。

「ありがとうね、サツキ」

ヨーコは図書室に行くと言う。一人で平気だと言い張るので、私はヨーコと別れて一人で教室に

戻った。一瞬室内はざわめいたが、私がすました顔で席につくと、静まった。ヒロタカだけが、むくれた表情で少し私を睨んだ。

午後の授業の準備をしている私のところに、アツシとカナエ、そしてハルナがやってくる。

ハルナは何か、ガムのようなものをくちやくちやと噛んでいた。

「サツキ、ヨーコは……」

アツシが口を開いた。

「うん。ちよつと落ち着いたみたい。今は少し一人になりたいって、図書室に行ったよ」

「そうか。ヒロタカも、何とかなだめたよ」

ほつとアツシが息を吐く。

その後ろからカナエが出てきて、険しい表情で聞いた。

「あのさ、サツキ。まさかと思うけど、あの裏サイトに書き込んだり、してないよね？」

「え？ 私はしてないよ。……書き込みは見ちゃったけど」

「裏サイトは、どこで知ったの？」

「知らない人から、アプリにメッセージが来て……」

「疑って悪いけど、それ、見せてくれない？」

詰問は続く。言われるままに、私はアプリのメッセージ履歴を見せる。それを見て、カナエはほ

つと息をつく。

「うん。ありがとう。気を悪くしたらごめんね。一応聞いておこうと思ってさ」

「カナエ、転校してきたばかりのサツキが、犯人だとは思えないけど」

アツシが言う。

「まあ、そうだろうけど。念のためだよ」

ハルナはポケットに手を入ると、もう一つガムを取り出し、口に入れた。

「犯人を探してるの？」

私が聞くと、カナエとアツシが頷いた。

「うん。『伝道師』なんて名乗って、悪質なことをしている奴は、許しちゃいけないと思うんだ。

こうして騒ぎにもなった以上、放置はできない」

アツシはきはきと言う。正義感の強い人だ。

「信じてもらえないかもしれないけど、私、伝道師じゃないよ」

「うん。あたしだって、サツキが犯人だとは思ってない。だけど、情報を集めないといけないからね。クラスの裏サイトなんだから、このクラスの中に犯人がいると思って間違いない。全員、疑うくらいの気持ちでいいよ」

「……なるほどね」

「そうだな、カナエの言う通りだ。俺は、他の奴らにも話を聞いてみる。ヨーコちゃんをいじめようとしている奴がいるのかもしれない。そんなの、あつてはならないことだよ」

鼻息を荒くするアツシ。カナエがふうと息を吐く。

「それにしても、伝道師って気味が悪いよね。ヨーコちゃんのこと、あそこまで調べるなんて、何だかストーリーみたい」

「偏執的だよな」

私も頷く。何か、普通じゃないものを感じた。

アツシが言う。

「とにかくさ、ヨーコちゃんは俺たちの手で、裏サイトの攻撃から守らなきゃ。書き込んだる奴、見ている奴、そして何よりもサイトを運営している奴を割り出して、止めさせないと。そのためにたくさん情報があるんだ、サツキにも手伝ってほしいんだけど……」

「サツキ、今日美術部出る？」

そこで唐突に話しかけてきたのは、マユリだった。

涼しい顔でこちらを見ている。その陰に隠れるようにして、トモミが上目遣いで私たちを眺めている。

「あ、マユリ、えーと……」

どうしようか迷っていると、アツシが不快そうに言った。

「おいちよつと待てよ、今俺たちが話してるんだから」

「え？ 別にいいじゃない、出席確認くらい。そんなに急ぎの話でもないんでしょ」

「急ぎの話だよ！ お前だって裏サイトのこと知ってんだろ？」

マユリはきよんとする。

「裏サイト？」

「知らないのかよ。クラスの裏サイトで、ヨーコちゃんの過去の秘密が暴露されたんだよ」

「へえ……どんな秘密か知らないけど、いじめみたいな話ね。それ、陣内先生も知ってるの？」

「ああ、知ってる。それで、ヨーコちゃんはショック受けてるんだ。犯人を探さなきゃならないんだよ」

「ああ……そう。あなたが探す必要ってあるの？ 陣内先生が対処すればいいんじゃないかと思っただけ……」

「何言ってるんだ。これは俺たちの問題だろ？ 俺たちが、やらなきゃ」

「……ふうん、まあ……頑張って」

マユリはあまり興味がない、といった感じで笑った。それがますますアツシの神経を逆なでしたようだった。

「何だよ、その態度」

「別に。そういうサイト、見ないから。でも、人の秘密に興味があるのって、みんなそうでしょ。そんなに慌てることじゃないと思うけど」

「ずいぶん無神経じゃないか」

アツシとマユリが睨み合う。トモミが、怯えた様子で二人の顔を交互に見る。

「だってそうじゃない。あなたたちも、そのサイト見てるんでしょ？ それって、あなたたちも人の秘密に興味があるってことなんじゃないの？ 同類じゃない。サイトの住人と」

きっぱりと言い切るマユリ。アツシはひるむ。

「いや、俺はたまたまヒロタカに教えてもらったから覗いただけで……」

「結局見たんなら同じでしょ。それに、誰だって秘密の一つくらい、あるものだよ。自分の秘密は知られたくないくせに、人の秘密は知りたい。そういうずるい人がいるから、そういうサイトがなくなる。悪質な暴露だってなくなる、そうでしょ」

「……」

マユリは一步も譲らない。アツシは黙り込んでしまった。

ショートカットの髪をさつとかきあげて、マユリは私に言う。

「サツキ。部活出るなら、待ってるからね。じゃ、行こ、トモミ」

そして軽快に足音を立てながら、出て行つた。トモミは不安そうな顔をしながら私たちを見ていたが、やがてマユリに続いて歩き出した。

「……何だ、あいつ」

アツシが眉間みけんに皺しわを寄せて、そう言つた。

§ 二章 マユリとトモミ §

迷つたけれど、私は美術部に顔を出すことにした。

アツシたちと別れて美術室に入る。他の教室より一回り大きな空間。その中央で、マユリが絵筆でカンバスを撫なでていた。トモミはそのすぐ後ろで、マユリの絵を楽しそうに眺めている。

私に気づくと、トモミは顔を赤くしながら軽く礼をした。私も「こんにちは」と口の中で言いながら頭を下げる。

マユリは絵に集中していた。そこから一瞬も目を離さずに、音も立てずに絵の具を混ぜている。世界中の時間が止まって、マユリだけが動いているように感じた。その白い鎖骨が、荘厳な彫刻ちやうしやくのように思えた。

綺麗きれいだなあ。

しばしマユリに見とれたのち、私も準備室から自分のカンバスを取り出す。油壺あぶつぼを出して脇に置く。その時、マユリの描いている絵が見えた。思わず息を呑のむ。こないだと同じガラスの花瓶かびんの絵だが、